

日本語における比較相関構文—認知言語学の観点から—

小林 翠 (大阪大学[院])

u038247b@ecs.cmc.osaka-u.ac.jp

1. はじめに

- 考察の対象：日本語における比較相関構文^{1,2}「X ば X ほど Y」³ e.g. 「食べれば食べるほど太る」
- 理論的枠組み：認知言語学、とりわけ構文文法 (Construction Grammar)
- 目的：「X ば X ほど Y」を構文 (construction) と捉え、主節の述語と主節の変化のターゲット⁴との関係から、「X ば X ほど Y」構文の意味的特性を考える。

2. 構文文法

●構文文法 (Construction Grammar) :

認知言語学の観点から分析を試みる文法理論の一つであり、主に Charles Fillmore や Paul Kay および Goldberg らによって展開されている。構文 (construction) という一般の統語規則や語彙的知識のみでは捉えることのできない単位を必要とするという考え方を持つ。

●Fillmore, Kay and O'Connor (1988) による構文の定義 :

By grammatical Construction we mean any syntactic pattern which is assigned one or more conventional functions in a language, together with whatever is linguistically conventionalized about its contribution to the meaning or the use of structures containing it. (Fillmore 1988:36)

●Goldberg (1995) による構文の定義 :

C is a CONSTRUCTION iff C is a form-meaning pair $\langle F_i, S_j \rangle$ such that some aspect of F_i or some aspect of S_j is not strictly predictable from C's component parts or from other previously established constructions. (Goldberg 1995:4)

●本研究における構文の定義 :

構文とは「個々の語とは独立して存在する、意味と形式が慣習化によって結びついたユニット」をいう。

3. 先行研究

●Fillmore(1989) :

英語と日本語の比較相関構文を取り上げ、これらの適切な分析の為には、これらを構文と捉える構文文法という文法理論が必要であることを提案している。

●Okamoto(1993), Okamoto(1994) :

構文文法の枠組みに基づき、「X ても X ても」「X たら X たで」「X に X」と共に「X ば X ほど」を構文と捉え、その意味・語用論及び形態・統語的特徴を記述している。

●野呂(2008) :

構文文法の枠組みに基づき、従属節に焦点を当てこれを構文として扱い、その意味的特徴を次のようにまとめている。「V ば V ほど」：時間の経過に伴って、主体が V する程度・量又は回数が変化するのに併せて、後件の事態の程度・量も変化する (野呂 2008:150)。

●石居(2008) :

由本(2005)で述べられた「V+過ぎる」との類似点から、日本語の比較相関構文を考察したものである。ここでは、従属節に生起する動詞と従属節における“比較のターゲット⁵”との関係を論じている。

¹石居(2008)では、この形式を日本語の比較相関構文と呼び、本稿でもそれを踏襲する。

²英語では「The 比較級 ~, the 比較級 ~」形式の構文が、この構文に対応する。

³本研究では、「X ば X ほど」を従属節、「Y」を主節とする。

⁴本発表では、主節において変化するものを、“主節における変化のターゲット”と呼ぶ。

⁵比較されている数量や属性の程度

●問題点①：

Okamoto(1993), Okamoto(1994)では、主節述語 Y に関して、状態変化述語だけでなく状態述語も生起できることを述べるに留まる。

→主節の述語には、状態変化、状態以外の述語も生起できる。

●問題点②：

野呂(2008)では、主節において変化するのは、事態の程度・量であると述べるに留まる。

→主節の変化のターゲットには、事態の程度・量以外の変化のターゲットも存在する。

⇒主節に置かれる述語には生起制限があるのか(問題点①)、主節において変化するもの(=主節における変化のターゲット)が何であるのか(問題点②)、これらを明確にする為にも「XばXほどY」を1つの構文とみなし、主節の述語に注目して考察する。

4. 考察

主節に生起する述語(動詞⁶、形容詞、名詞)と、主節における変化のターゲット(参加者の数量、事象の回数、述語の程度)との関係を整理し、それを基に「XばXほどY」構文の意味的特性を考える。

動詞

A. 動き動詞

A1. 動作動詞 <継続> 主節における変化のターゲット：[参加者の数量]、[事象の回数]

(1)まめな人であればあるほど、手紙を書く。

(a)まめな人であればあるほど、たくさん(の)手紙を書く。 [参加者の数量]

(b)まめな人であればあるほど、手紙を何度も/次々と書く。 [事象の回数]

(c)*まめな人であればあるほど、手紙を非常に/とても書く。 [動詞の程度]⁸

(2)健康志向の人であればあるほど、野菜を食べる。

(3)トヨタが失態を犯せば犯すほど、アメリカが笑う。

A2. 動作動詞 <瞬間> 主節における変化のターゲット：[参加者の数量]、[事象の回数]

(4)森を奥へ進めば進むほど、昆虫を発見する。

(a)森を奥へ進めば進むほど、たくさん(の)昆虫を発見する。 [参加者の数量]

(b)森を奥へ進めば進むほど、昆虫を何度も/次々と発見する。 [事象の回数]

(c)*森を奥へ進めば進むほど、昆虫を非常に/とても発見する。 [動詞の程度]

(5)綺麗好きであればあるほど、ゴミに気づく。

(6)頭が良ければよいほど、他人の欠点が目につく。

A3. 変化動詞 <継続> 主節における変化のターゲット：[述語(動詞)の程度]

(7)景気が後退すればするほど、財政は悪化する。

(a)*景気が後退すればするほど、たくさん(の)財政は悪化する。 [参加者の数量]

(b)*景気が後退すればするほど、財政は何度も/次々と悪化する。 [事象の回数]

(c)景気が後退すればするほど、財政は非常に/とても悪化する。 [動詞の程度]

(8)機械化が進めば進むほど、ハンドメイドの価値は高まる。

(9)反対されればされるほど、思いは強まる。

(10)寒ければ寒いほど、部屋を暖める。

(11)タバコを吸えば吸うほど、生活習慣病のリスクを高める。

⁶本研究では、語彙的アスペクトの観点から、主節に生起する動詞を次のように分類する。

A. 動き動詞：A1 動作動詞<継続>、A2 動作動詞<瞬間>、A3 変化動詞<継続>、A4 変化動詞<瞬間>

B. 状態動詞：B1 存在動詞、B2 特性動詞

⁷本研究で用いる動詞クラスは、工藤(1995)及び日本語記述文法研究会編(2007)を基に、再分類したものである。

⁸「非常に/とても」が逸脱性を持たず解釈可能に感じられるのは、「非常に/とてもたくさん(の)手紙/野菜/昆虫/ゴミ/葉/角質/ビル/お金/救援物資」のように、参加者の数量を付与する成分の読み込みがおこなわれている場合である。

A4. 変化動詞 <瞬間> 主節における変化のターゲット：[参加者の数量]、[事象の回数]

(12) ヨン様が微笑めば微笑むほど、おばさまが卒倒する。

(a) ヨン様が微笑めば微笑むほど、たくさんのおばさまが卒倒する。

[参加者の数量]

(b) ヨン様が微笑めば微笑むほど、おばさまが何度も次々と卒倒する。

[事象の回数]

(c) *ヨン様が微笑めば微笑むほど、おばさまが非常にとても卒倒する。

[動詞の程度]

(13) 田舎であればあるほど、未成年が結婚する。

(14) 木を揺らせば揺らすほど、葉が落ちる。

(15) 暑くなればなるほど、汗が出る。

(16) 擦れば擦るほど、角質が取れる。

(17) エコ意識が高ければ高いほど、電気を消す。

(18) きれいな女性であればあるほど、目で男を殺す。

(19) 不注意であればあるほど、小銭を落とす。

B. 状態動詞

B1. 存在動詞 主節における変化のターゲット：[参加者の数量]

(20) 都会に近づけば近づくほど、人がいる。

(a) 都会に近づけば近づくほど、たくさんの人がいる。

[参加者の数量]

(b) *都会に近づけば近づくほど、人が何度も次々といる。

[事象の回数]

(c) *都会に近づけば近づくほど、人が非常にとてもいる。

[動詞の程度]

(21) 北に行けば行くほど、雪がある。

(22) 被災地では、日が経てば経つほど、救援物資を要する。

(23) 名門幼稚園であればあるほど、お金がかかる。

B2. 特性動詞 主節における変化のターゲット：[述語 (動詞) の程度]、[参加者の数量]

(24) 背が高ければ高いほど、服が似合う。

(a) 背が高ければ高いほど、たくさんの服が似合う。

[参加者の数量]

(b) *背が高ければ高いほど、服が何度も次々と似合う。

[事象の回数]

(c) 背が高ければ高いほど、服が非常にとても似合う。

[動詞の程度]

(25) 一流メーカーであればあるほど、商品が優れている。

(26) 秋葉原好きであればあるほど、アニメに精通している。

(27) 日当たりが悪ければ悪いほど、植物はひよるひよるしている。

形容詞

イ形容詞 主節における変化のターゲット：[述語 (形容詞) の程度]

(28) 苦勞が多ければ多いほど、喜びは大きい。

(a) *苦勞が多ければ多いほど、たくさんの喜びは大きい。

[参加者の数量]

(b) *苦勞が多ければ多いほど、喜びは何度も次々と大きい。

[事象の回数]

(c) 苦勞が多ければ多いほど、喜びは非常にとても大きい。

[形容詞の程度]

(29) 宝石は、大きければ大きいほど高い。

(30) 子どもが多い世帯であればあるほど、生活水準が低い。

(31) 田舎に行けば行くほど、自民党が強い。

ナ形容詞 主節における変化のターゲット：[述語 (形容詞) の程度]

(32) 身長が低ければ低いほど、騎手は有利だ。

(a) *身長が低ければ低いほど、たくさんの騎手は有利だ。

[参加者の数量]

(b) *身長が低ければ低いほど、騎手は何度も次々と有利だ。

[事象の回数]

(c) 身長が低ければ低いほど、騎手は非常にとても有利だ。

[形容詞の程度]

(33) その洞窟は、奥に進めば進むほど静かだ。

(34) 能力が高ければ高いほど、謙虚だ。

名詞 主節における変化のターゲット：[述語（名詞）の程度]

(35)売れば売るほど、黒字だ。

(a)*売れば売るほど、(たくさんの会社が) 黒字だ。

[参加者の数量]

(b)*売れば売るほど、何度も/次々と黒字だ。

[事象の回数]

(c) 売れば売るほど、非常に/とても黒字だ。

[名詞の程度]

(36)フィギュアを持っていれば持っているほど、オタクだ。

(37)知能指数が高ければ高いほど、天才だ。

●主節の述語と“主節における変化のターゲット”の関係

- ・動き動詞（+程度変化）の事例 (A3) ⇔ [述語（動詞）の程度]
- ・動き動詞（-程度変化）の事例 (A1, A2, A4) ⇔ [参加者の数量], [事象の回数]
- ・状態動詞（+程度）の事例 (B2) ⇔ [述語（動詞）の程度], [参加者の数量]
- ・状態動詞（-程度）の事例 (B1) ⇔ [参加者の数量]
- ・イ/ナ形容詞の事例 ⇔ [述語（形容詞）の程度]
- ・名詞の事例 ⇔ [述語（名詞）の程度]

●主節述部から見た「XばXほどY」構文の意味的特性

- ・主節述語が「動詞」の場合：+程度変化の動詞ならば、言語形式通り、動詞の程度が変化する。+程度の動詞ならば、動詞の程度部分に‘変化’が読み込まれ、その程度が変化する。
-程度変化/-程度の動詞ならば、参加者の数量や事象の回数に変化する。
 - ・主節述語が「形容詞」の場合：形容詞自体は程度変化を含意しないが、形容詞の程度部分に‘変化’が読み込まれ、形容詞の程度が変化する。
 - ・主節述語が「名詞」の場合：程度性を含意しない名詞が程度を強要され、名詞の程度部分に‘変化’が読み込まれ、名詞の程度が変化する。
- 主節述語には生起制限がなく、言語形式としてそれ自体で程度変化を明示しない述語でも生起可能である。
そして、主節には常に何らかの“変化のターゲット”が存在する。
⇒これは、主節の‘変化’という意味が、主節の述語自体から得られるというよりもむしろ、「XばXほどY」という形式から生じていることを示しており、「XばXほどY」が構文として機能しているといえる。

5. おわりに

主要参考文献

- Fillmore, C.J.(1989)「生成構文法による日本語の分析—試案」『日本語学の新展開』,pp.11-28, くろしお出版
- Fillmore, C.J., Kay, P. and O'Connor, M.C. (1988)“Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: the case of let alone,” *Language* 64, pp.501-538.
- Goldberg, A. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- Okamoto, Shigeko (1993)“Idiomatic Conditionals in Japanese,” *Japanese/Korean Linguistics* 2, pp. 68-81
- Okamoto, Shigeko (1994)“Argumentative Verbal Repetitive Constructions in Japanese,” *Cognitive Linguistics* 5(4), pp.381-404
- 石居康男 (2008)「日本語における比較相関構文について」『言語研究の現在』, pp.248-258, 開拓社
- 井本 亮 (1999)「「ほど」構文の解釈と主文の有界性について—述語動詞句の動詞分類を中心に—」『筑波日本語研究』4, pp.42-70
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 小林 翠 (2010)「XばXほどY」構文のカテゴリー構造—構文文法論の観点から—『日本認知言語学会予稿集』11, pp.220-223.
- 仁田義雄 (2002)『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2007)『現代日本語文法3 第5部アスペクト 第6部テンス 第7部肯否』くろしお出版
- 早瀬尚子(2003)「認知文法における構文の扱いについて—形容詞コピュラ構文を例に—」『大阪外国語大学言語社会学会論文集』9, pp.85-103
- 野呂健一(2008)「動詞の反復表現「VにV」「VだけV」「VばVほど」について」『日本語学会2008年度春季大会予稿集』, pp.143-150.
- 由本陽子 (2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形性』ひつじ書房